

伊能忠敬

日本列島を測る 前編

一 忠敬没後二〇〇年一

表紙解説

伊能大図八一号 長野（国立国会図書館蔵）

伊能測量隊は、第3次測量と、第8次測量の帰路、信濃国を通っている。

第3次測量では、陸奥、出羽、越後と日本海沿岸を測量しながら南下し、直江津から北国街道に入って善光寺宿へ出、あと、上田、小諸を通り、中山道に出て江戸に戻った。『測量日記』に、善光寺宿逗留中、朝、善光寺に参拝したことが書かれている。

第8次測量は、九州第2次測量の帰路で、飛騨高山から野麦峠を越え、塩尻、松本から再度善光寺に立ち寄った。その後、豊野から飯山まで進んで反転し、須坂、松代、戸倉から軽井沢方面へ向かい、江戸へ戻った。これにより、信州北部の側線は充実し、真田氏の松代と堀氏の須坂を側線が通ることになった。善光寺の再訪では『測量日記』に、「六ツ時出立。我ら善光寺本堂制札より初め、北国街道重側（再度測ること）」とあるのみで、善光寺への参拝はなかった。

この図では北が上になっているため、文字が逆向きである。図の中央を信濃川が蛇行しながら、兩岸に砂州を伴って描かれ、犀川と千曲川の合流点付近は特に広い砂州が描かれている。

※渡辺一郎「表紙解説」〔『伊能忠敬研究』70号〕による。



伊能忠敬旧宅（千葉県香取市）



伊能忠敬記念館（千葉県香取市）

序言

2018年は伊能忠敬の没後200年にあたる。

忠敬は17年に及んだ全国測量を終え、最終的な地図が作成途上にあつた文政元年（1818）4月13日（太陽暦5月17日）に73歳の生涯を終えている。しかしそれは秘されたまま、地図作成は隊員の手で続けられて文政4年（1821）に完成、忠敬の名で上呈されたのちに喪が明かされた。したがって公式の没年は1821年、実際の没年は1818年ということになる。

よく知られているように、現在広く「伊能図」と呼ばれている正確な日本図は、伊能忠敬とその測量隊の実測によるものである。一貫した方法による国土全域の実測図はこれが最初であつた。日本の海岸線の形状をはじめて正確にとらえたこの地図は、幕末から明治にかけての変革の流れのなかで、新しい国土像を描くうえでの基礎資料として高く評価され、大きな役割を果たした。その業績は明治16年に正四位贈位、同22年、東京の芝公園丸山古墳上に「正四位伊能忠敬先生遺功表」が建立されたのにつづき、小学校の読本（教科書）に取り上げられるなど、広く知られるようになった。刻苦勉励の人という側面に目が注がれる一方、科学的な業績としての測量事業は科学的に解明される必要があるという提言もあり、大正6年（1917）には帝国学士院の委嘱をうけた大谷亮吉による研究書『伊能忠敬』¹が出版された。監修者で、この研究の提唱者でもあつた物理学者の長岡半太郎は、序文のなかで翌大正7年が忠敬の没後100年の節目であることにふれている。この書が現在もお伊能忠敬とその仕事についての基本図書のひとつであることはよく知られているとおりである。

ほかにも多くの個別の研究が蓄積されてきたが、没後150年には、保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』²、生誕250年には、東京地学協会編集『伊能図に学ぶ』³が出版されるなど、節目を期してそれまでの研究の集大成や展望がまとめられている。本書は「伊能忠敬研究会」による「伊能忠敬没後200年記念事業」の一環である。

「伊能忠敬研究会」は、1995年11月に千葉県佐原市（現香取市）でおこなわれたフランス伊能中図里帰り展を契機として設立された研究団体で、これまで、発起人の渡辺一郎氏（現名誉代表）を中心に、現在国宝指定を受けて香取市の伊能忠敬記念館に収蔵されている伊能忠敬関係資料の精査、各地、各機関に埋もれた伊能図の諸種の写本や、地域史料の発掘、研究とともに、「伊能忠敬展」（江戸東京博物館）、「伊能ウォーク」（日本ウォーキング協会・朝日新聞社共催）、原寸大の複製パネルによる「完全復元伊能図全国巡回フロア展」（28会場）などの普及活動をおこなってきた。

研究会誌『伊能忠敬研究』は現在84号に達しており、史料探究の足跡や全国に広がる会員の、現地ならではの報告など、従来のアカデミックな研究の蔭に潜みがちな成果が豊かに蓄積している。そこで、当会による「伊能忠敬没後200年記念誌」としての本書は、全国をめぐる測量隊の足跡に光をあてることを企画の柱とした。これまでの会誌に掲載された会員の研究成果が本文記事の随所に取り入れられている。

第1次から9次まで、合計3660日余りの測量行程は、欠かさずに記録された「測量日記」28巻⁴によって知ることができる。測量隊の人数は時期により5人から19人であるが、測量先の各地では手伝いや宿泊などに膨大な地元の人びとの協力があつた。「測量日記」に記録された人名は1万4千名におよぶという。測量隊への対応を記録する地域史料の数も多く、測量の実行にかかわる記述が中心の「測量日記」を補完する測量隊の様子や受け入れ側の苦労などがよみとれる。

本書の特色は、測量日記、書状や各地の文書、旧道、史跡、伝承などからわかる測量隊の足跡を都道府県別にまとめていることである。これまでも測量の経路についての詳しい記述は多いが、いずれも測量の回次ごとに経路を追っている。しかし、特に測量が幕府事業となつた後半、西日本の測量においては、内陸の往還も網の目のように測るため、現在の県・郡といった地域単位でみると回次の違う測量コースが入り組んでいる場合が多い。兵庫県の場合を例にとると、第5・6・7・8次の測線（測量コース）が通っている。現在の地域単位での測量がどのように進んだかを知るためには、各次の該当箇所を拾って総合しなければならず、不慣れた読者には厄介であつた。測量コースや測量隊の記念碑などを探訪する手がかりとしても、地域単位の測量進行の全体像を一目で把握できる資料は有用であろうと考える。

固い研究書ではなく、測量の進行や、測量コースの比定、記念碑、地域でのエピソードなど、生身の伊能測量を、地域別にわかりやすくまとめて紹介することをめざしている。本書が、思いがけず身近に存在する伊能忠敬や測量隊ゆかりの地を知り、学習を深めるためのよすがともなれば幸である。

記念碑・案内板、宿舍情報、史料や文献の所在などについては、各地の自治体にも照会し、多くの機関から多大なご協力をいただいた。本書収録の記念碑・案内板一覧表は194件に及んでいる。各自治体担当者の皆様には、記して深く感謝を申し上げる。また、河出書房新社には『伊能図大全』収録画像等の使用について随所使用の許諾をいただいた。併せて感謝申し上げます。

2018年4月13日 伊能忠敬研究会代表 鈴木純子

¹ 大谷亮吉著『伊能忠敬』岩波書店 1917

² 保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』古今書院 1974

³ 東京地学協会編『伊能図に学ぶ』朝倉書店 1998

⁴ 伊能忠敬の測量日記には、測量実施中に書いた51冊（忠敬先生日記とよばれる）と、のちの忠敬自身による浄書本28冊（「測量日記」と呼ばれる）の2種がある。いずれも伊能忠敬記念館蔵、国宝。

もくじ (前編)

口絵

序言

もくじ

第一章 伊能忠敬の人と業績

1 伊能忠敬の実像を求めて

星埜由尚 2

2 伊能測量の概要

測量行程図

渡辺一郎 11

測量次別参加隊員一覧・隊員プロフィール

河崎倫代 17

3 伊能忠敬の測量

菱山剛秀 20

4 伊能図の世界

鈴木純子 30

第二章 伊能忠敬が歩いた日本

1 東日本編

北海道 (42) ・青森県 (46) ・宮城県 (50) ・岩手県 (54) ・福島県 (58) ・

秋田県 (61) ・山形県 (64) ・茨城県 (68) ・埼玉県 (71) ・栃木県 (74) ・

群馬県 (76) ・千葉県 (80) ・東京都 (85) ・神奈川県 (90) ・新潟県 (94) ・

山梨県 (98) ・静岡県 (102) ・富山県 (107) ・石川県 (110) ・福井県 (113) ・

長野県 (118) ・愛知県 (222) ・岐阜県 (126)